



高女の皆さんありがとう
愛知淑徳学園 理事長
小林 素文

愛知淑徳学園は、昨年、創立
百十周年を寿ぐことができた。
これは、偏に、それぞれの
時代にひたむきに青春を送られ
た生徒の皆さん、卒業してから
も学園を心の古里と思つて下さ
る同窓生のお蔭であります。

今や、十万人近い卒業生数とな
りましたが、愛知淑徳のバツ
クポーンを築いて下さったの
は、学園創立時から戦前、戦中、
戦後と困難な時代をくぐりぬけ
てこられた高等女学校の皆様で
す。

愛知淑徳は、明治三十八年、
愛知淑徳女学校として誕生し、
翌年の五月十七日に文部省の認
可を受け、同年九月、愛知淑徳
高等女学校（以下、高女）とし
て歩みを始めました。

高女が創立された当時、そし
て戦前・戦中を通して、日本社
会は家長長制で女子には選挙権
もなく、女性の生き方も限られ
ていました。そうした社会環境
に問題意識を持ち、教育に希望
を抱く生徒も次の作文のように
いました。

昔からの女大学式の奴隷的道
徳に依つて、型にはめられた日
本女性の地位は、余りにじめ
です。：：勿論、昔の女子には許
されなかつた範囲が許されて参
りました。女店員、女車掌、

ウェイトレス、女事務員と。

：：女の勝利？之を見て、こ
う叫ぶ事が出来ませうか。：：女
員を雇い、郵便局や諸銀行が女
事務員を採用し、電話局が交換
手を使うのは、女子を優遇する
為でせうか。いいえ、女子の賃
金は男子の比して遥かに安い
からです。家にあつては皆に「女
のくせに」扱いにされ、嫁とし
ては夫の道具になり、職業婦人
となつては安い賃金を受ける。

斯くの如き女子の社会的地位を
高くするには、どうしたら好
い。私が先ず第一に思ひいたる
のは教育ということ。です。す
から現代婦人は、宜しく今日よ
り向上した、徹底した教育を受
けて、非常に欠陥のある現在の
社会制度を改めねばなりません
（淑徳」第一七六号、大正十一
年より）

高等女学校の位置づけは、良
妻賢母の育成であり、そのため
の女子教育は家事と裁縫で十分
とする風潮の中、創立者小林清
作先生は「十年先、二十年先に
役立つ人材の育成」を掲げ、随
意科目の英語を必須科目とする
など果敢に新しい教育をすす
めました。

創立者の思いのこもつた教育
を受けた第一回の卒業式の模様
は、扶桑新聞（現在の中日新聞）
に「美なる卒業式」「校長別れ

を惜しみて泣き、卒業生亦泣き
て校門を出ず」と題して報道さ
れ、「形式のみを本位とせる当
代の学校卒業式中、実に、見る
を得ざる美観なりし」と論評さ
れました。

創立当時、高等女学校への進
学率は5%にも満たず、生徒は

良家の子女に限られ「深窓の佳
人」が理想とされていきました
が、創立者は「これからの美人
は壮健の色が漲り、均斉に発達
した肢体を有するものでなけれ
ばならぬ」として「美人観の革
命」をとなえられました。これ
により体育が奨励され、文武両
道の学校が築かれていきます。

昭和三年、池下に校地校舎を
移転しました。池下はその名の
通り低い土地で、地下水が豊富
でした。それを利用して作られた
プールで水泳部は練習しまし
た。その時の様子を卒業生は次
のように語っています。

「私達は底の見えるプールで
泳いだことはありません。それ
程前のプールは青黒く濁つてい
たのです。：：青黒い池のプー
ルには足の長い舟虫やら、背中
にイボイボのある茶色のひきが
えるやら、青い蛙の可愛いのも
いました。うっかりターンでも
しようものなら、目の前にイ
ボガエルと鉢合わせという事
だつて、日常茶飯事で、そんな
時『キヤー』なんて声は出せま
せん。出したら大変。『神聖な
プールで奇声を発するとは何事
です』という事で、足のだるく
なる程立たされて、最後には先
生にあやまり、上級生にあやま
りで、簡単に『キヤー』ではす

まさらなかつたのです」
（学園六十周年史より）

今では考えられないような環
境で生徒は努力し、水泳部は全
国大会での優勝を重ねていきま
した。まさに淑徳魂の一つであ
る頑張る精神を発揮していたの
です。

昭和十二年日華事変がおき、
昭和十三年には夏休みに勤労奉
仕がはじまり、次第にそれが長
期化して出校日の方が少なく
なつていきます。やがて、太平
洋戦争が勃発し、学校にも「報
国隊」が組織されます。運動場
は農場に変わり、勤労動員が始
まります。男子教員は二人だけ
という事態にもなり。昭和二十
年八月ようやく終戦となります。

終戦間もない八月二十六日、
被害をまぬがれた講堂で追悼会
が挙行され、高女の生徒総代は
次の追悼文を捧げました。

「：：この学舎に数々の教へ
子を心から御親切にお導きくだ
さいました石田先生を始め、
共に工場に於いて敢闘いたして
参りました十名の友垣は、不幸
にも散弾の犠牲となられ、ただ
必勝を信じてこの世をお去りに
なりました事は、返すがえす
も悲しき極みでございます。

：：今後私達の身には幾多の苦
難が襲つてくることと思ひます
が、これ等亡き御霊に對しまし
ても、きつと戦い抜いて日本再
建に努力いたす覚悟ございま
す。どうぞ私達の謹みて捧げま
つる追悼の誠をお享けくださ
いまして、とこしえに安けく御
しづまりくださいませ」（学園
六十年史より）

終戦の翌年、戦後最初の卒業
式がおこなわれ、卒業生総代は
次の答辞をしました。

「私共は今の今こそあらゆる
困苦欠乏を物ともせず、突き進
んでいくだけの覚悟がございま
した。：：今や私共は新日本建設
の重大使命を帯びてをります。
又婦人参政権も与えられました
私共の責任は並大抵のものでは
ありません。私共は、在学中御
親切に御指導下さいました御教
訓と修得させていただきました
各学科の実力を以つて精かぎり
根かぎり業を励み修養につとめ
まして、立派な婦人となり、尊
き御恩の万分の一にもお答えし
たいと存じます。」（学園六十
年史より）

戦後の新しい体制のもと、高
女は昭和二十二年に募集を停止
し、同年愛知淑徳中学校開校、
翌年愛知淑徳高等学校が開校さ
れ、昭和二十四年高女最後の卒
業式がとりおこなわれ、高女
四十四年の歴史の幕が閉じられ
ました。

愛知淑徳同窓会にまいります
と、八十代、九十代の高女出身
の方がお見えになります。戦後
の大変な時期を乗り越え年輪を
重ねられ、「淑徳魂で頑張つて
きたのよ」と穏やかに話される
人生の大先輩の温かな人柄に接
すると、古希過ぎの私も元気づ
けられます。

学園の礎を築いて下さつた
六三三三名の高女の卒業生の皆
様に、心よりのお礼と感謝を申
し上げます。ありがとうござい
ました。